

## 第56回定期演奏会批評

### ◆東京ニューシテイ管弦楽団

#### 第56回定期演奏会

音楽監督兼常任の内藤彰の指揮。今回はナショナルエディションによるショパン・シリーズの2回目です。ベシヤリスト河合優子が今度はへ短調を日本初演。全3曲共新版により、

併せてもちろんピリオド奏法も使用された。前座のメンデルスゾーン／序曲「フィンガルの洞窟」から最近の内藤ニューシテイの好調ぶりを示すかのようにフレッシェで威勢のいい名演。高潮部のスピード感はなかなかのものでひよつとするとフルト

ヴェングラーに匹敵するかも。次の河合のソロによるショパン／ピアノ協奏曲第2番へ短調も版云々よりまず演奏自体が一級品だったのが嬉しい。また版の混乱はショパンの改訂癖と作曲家自身が完全な管弦楽譜を作っていないことが原因のよう

で、細部はかなり異なり短調が長調に変わってしまった部分さえあった。

後半のメンデルスゾーン／交響曲第4番イ長調「イタリア」もフィンガル同様、活気に溢れた超スピードの快演。(6月15日、東京オペラシテイコンサートホール)  
(浅岡弘和)